

特別講演「東京栄養サミット2021」

から見えてきた管理栄養士・栄養士の役割

講師 (公社) 日本栄養士会
会長 中村 丁次氏



1. 「東京栄養サミット2021」開催への道

2013年6月、ロンドンにおいて「成長のための栄養サミット：ビジネスと科学に基づいた飢餓との戦い」が開催された。これが最初の「栄養サミット」となり、以後

オリンピックの年に開催国で栄養サミットを行うこととなった。

この最初の会議でコミットメントされた内容を国際食糧政策研究所が「2014年世界栄養報告」として出版。これ以降毎年出版されている。この報告の序文：理念に「良好な栄養状態は、人間の幸福の基盤になる。」とある。栄養問題が単に、健康問題に限定されないことを示している。

また世界では、環境問題が深刻になり、持続可能な開発を目標とした国際的議論が始まった。2012年6月、リオで開催された「国連持続可能な開発会議」で「持続可能な開発目標(SDGs)」が提唱され、2015年の国連総会で採択された。

SDGsに対して栄養は、保健・医療・福祉のみならず、教育・経済・労働・ジェンダー・農業さらに環境にも、複雑かつ多様な形で関係し、ほぼ全ての領域の下支えをしている。栄養の不良の解決なくしては、SDGsの目標が達成できない。

2. 「東京栄養サミット2021」開催される

「東京栄養宣言」(要約)：栄養は個人の健康と福祉の基礎であるとともに、持続可能な開発と経済成長の基盤である。良好な栄養への投資は、人々の健康を改善し、一人ひとりの可能性及び生産性を伸ばし、国の経済発展を支える機会となる。栄養不良は全ての国にとっての課題であり、多くの国は栄養不良の二重負荷に苦しみ、新型コロナウイルス感染症のパンデミックの影響により公平性が一層の課題となった。

我々は、SDGsアジェンダの一部として2030年までにあらゆる形態の栄養不良を終わらせるために、健康、食、強靭性、説明責任、財源の5つのテーマ別分野にわたって栄養に関する更なる行動を取ることにコミットする。

3. 日本栄養士会公式サブイベントを開催

日本栄養士会公式サブイベントでの主張：栄養不良の二重負荷は全世界で発生し、特にアジア・アフリカで深刻な事態になりつつある。新型コロナウイルスの影響で世界の低栄養者は増

え、十分な栄養が摂取できない人は、2019年時点での30億人から、さらに1億4100万人も増えた。

食料不足による栄養不良が広がる一方で、富裕層では食事の欧米化による過栄養、そして栄養政策の不備や研究・教育の遅れなどが見られる。世界から栄養不良を撲滅するには、緊急時の食糧援助や経済援助が必要である。

しかし、これらだけでは根本的な解決にはならない。援助が中断すれば、元の木阿弥になるからである。栄養不良撲滅には、自立した持続可能な栄養改善を実施する必要があり、その為には、栄養政策を組み立て、栄養の専門職である管理栄養士・栄養士を要請、制度化し、社会の隅々まで配置する必要がある。

4. 日本の食事と環境

日本の食事におけるカーボンフットプリントは世界の中でも低く、例えば、畜産由来の割合は、欧米の半分以下である。つまり日本食は環境負荷が少なく、プラネタリー・ヘルス・ダイエットに近い。

5. Withコロナとジャパン・ニュートリション

新型コロナウイルス感染症の予防には、生体の抵抗力をつけることが大切。しかし高齢者では、やせや血清アルブミン値の低下により、ワクチンの接種後の抗体陽性率が低下し、感染予防率も低下する。各種ビタミン・ミネラルの欠乏は免疫細胞の機能低下を招く。

肥満者では、内臓脂肪細胞から炎症性のサイトカインが大量に産生され、新型コロナウイルス感染により炎症が拡大し、免疫機能が暴走するサイトカインストームが起きている。

つまり予防には低栄養、増悪化防止には過栄養の改善が必要。

最後に、「東京栄養サミット2021」では、栄養は健康増進、疾病の予防、治療など健康問題の一要因、つまり“One of Them”と考えられていたが、健康のみならず教育、経済、ジェンダー、環境などにも影響を与える“One for All”であり、幸せの基盤となることを世界の人々に発信した。

今後も、自然を尊重し、四季折々の変化を楽しむ伝統的食文化を大切にしながらも、栄養学の科学的根拠に基づいた栄養改善により、誰をもとり残すことなく、持続可能で健康長寿を可能にする日本の栄養(Japan Nutrition)を世界に発信する。

(文責 地活 吉山美和)